



紫女七論



1135

11.9.24

紫女七論

朝夕にみと
 はなれぬ
 文なれど
 しほしはみせむ
 とくかすしよ

神藤藏書

此系廿七論

附系圖

才德無備

七支共具

修撰年序

文章無雙

作者本意

一部大事

正傳說誤

以上

藤原為章撰



世の事... 今按... 又云...

今按... 又云...

又云... 今按...

今按...

又云...

今按... 又云... 今按...

今按...

又云... 今按...

今按...

白鳥のしるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

まじりておぼしむるに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるし

同平十日のうら二條院行幸上東門院而存

又之行幸ありしに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

今撰此は、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

しるしをいふに、昔は花のいろはのしるしをいふに

又云、寛政五年、源氏のいろはのしるしをいふに

上皇の院
源氏をいふ

うは文おんりねをるねやちかはらちを……をのこはてもた……ゆ……を……あり
りね……のめるは……

今按けいも男子あり……

又云宮みやのおままにて文集の所……
り……
……
……
……

今按けり記の飯……
……
……
……

の月紀げつき……
……

……
……

……
……

……
……

……
……

其二 七支共具

父為時ときの友三品さんひん……

らこれよりこれを父として生まれ其兄惟規も後拾遺よりはしりて
事の集めも入るる方人としてそのものなりひつるを従くふりうへ
忘る所も或部の中きゆえはとううしとてこれに聰明ありて
神童ありけり——其二とあるまはしけりしきとてこれに学文といふ
きののちまふかの学宮はふぬとありしよしあつき和漢の積書をいふ
音楽以下の書もたてしとて——とてゆふ載集云上東門院より
とて世里ふそまらりたるある甘房のせしとてこのついでに筆つとてゆまうと
しひて作りければいひつるは家或部なり

一 藤原の御孫のひひは神を御んけりていひつる

一 禁裏院中中宮

親王御家のほうくにはまわりらひいて元日節會よりけりあ追離ま至
るゆへ恒例臨時一とせのちの或はふ合後らとせま合蹴鞠なりと後
とあるまはりのうたりにそのまると肥をり醍醐代もあま上つとて
なりす又衰せりて中華にそと文質ありきる世子生れり 其二
磨りうし位あるまは泊瀬りしゆぬや治大守野流城にし向
ひうし向は口かんされ乃わたり小野の奥らう海の谷日枝の心とて
嶺ありて女をいひありあるまは右所舊跡を歴遊しきりしと申是
こゝに才氣のますけとあるまはのち河内山やとらふまは父う位あり
わりむ多時あるの作あるなり——
まはしりて家ありてまはしりてゆまうとていひつるをいふまはしりて
世のまはしりてまはしりてまはしりていひつるをいふまはしりて
まはしりてまはしりてまはしりていひつるをいふまはしりて

のゆきとあるに和祖常陸公為信武に母の...
一節のきと河とものには...
そのゆのひらぬまき筆...
もこのゆのわきまきり...
およそんや或於きぬ...
ぬくともひのそまき...
うづはりのめりう...
にこそ或部とま...
くむう...
六

其三 修撰年序

日記 寛弘五年 云尼階門督...
とくうひう...
まきぬそん...

今格...
流布...
せ...

又曰年云源氏の物語...
今格河海所に寛弘の始...
うてやや...
はと...

らひ海きりのにちりす五條も又同時同輩の花とけりしや
にけすそそ初花の巻とゆふ海——やふくゆり（市川）の巻の巻
ハ海に院の御世のものをさる——ゆり 五條り——存生せば百ね十
半あり海——いふこさやうに長壽のものをさうすは和歌赤
海うゆりぬ泡扱多ければも半長らぬいさ——垂れつ——おら
ゆ——浮世毒傳にこそをきく存生とくは——くよ——ころろ
海——といは同人和のぶらさきうは——てまつてぬ

其四 文章無雙

物語のちちわう花判ともよ万葉古今仔細物語うつがをけりる
との古體とそめけて去つて和歌とつに海とつに海とつに大

うら五國の海流とつしきねに——く——て倦むのとあ——ら——む
海とよる海とよるの上をさひのりう 全篇に為る潤と文章やして
宮城の文章やれども中に山林あせりり 市井國家のり 貞園喜信
りり園情風景、巻毎よそそそ情とつ——とをわく——らふの
りりそくよむひてそ所よあそめつし 全体は海とつて又あつ
う——序の海りり路りり記りり論りり素りりて諸体とそそれり
かのももこの巻の子定はけよそ妙ありりの心巻 とうてそそそとあ
らそ免れつる時よ序とそそ論破りり論承りり論腹りり論尾りり
幕りり細りり俗りり雅よゆむき勢りり簡と海——かの間頓挫照
應伏案ありりりり——の文法ゆつ——そそそりそのそと脈と

悠揚として寛裕よりの文勢に圓活にして婉曲（是所定りしは行はれ一於ては）

史記莊子韓柳歐蘇に等し一なる毎に（其の筆めては）つらつら

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

〜或終にまこと古今獨歩の文と云ふ〜

呂不韋之子則是嬴氏爲呂氏所滅也司馬氏欺人孤
寡而奪之位不知魏滅未幾而晉亦滅矣何也元帝乃
牛金之子則是司馬氏爲牛氏所滅云これ他のまじり
はそまじりなりけり況や朝廷ハ皇神のまじりたるに
このうへに世系をきりたやあそまきみそまの世も如
身衣のまじりに心をあやうぬらうまじり帝系乃ま
きれもそまねるやと遠くあやむけり諷をきりて
或終にやあれもその生質のまじりや問のちつとあはひて
識見あつて大儒のまじりなりとてさうもさうも大
おのりハ天道好還の理をまじりてまじりめしき羅大經

の筆小同——は二件うまじりの大りなりて講はる人の心
しきりて欺人の云はりやとてさうもさうもまじりたる物
法をまじりてこそく道理を設て論をまじりて或終にやま
まじりたるや——や答云まじり定云なりはまじりたるに
まじりたるものねるやまじりたるまじりたるにまじりたるも
あまじりたるまじりまじりたるまじりたるまじりたるも
目も所まじり——まじりたるまじりたるまじりたる——皇胤
あ一代はてもまじりたるまじりたるまじりたるまじりたる
まじりたるまじりたるまじりたるまじりたるまじりたる
藤原公深氏のまじりたるまじりたるまじりたるまじりたる

しからばちかしく、淳氏の嫡子の罪ありと云ふ皇胤不
たれども、そのあつたに、す相壺の帝の御為に、
強之神武天皇の御血脉あり、伊勢の宗廟その祀をうけたまひ
天下の蒼生その政せしむるべきに、
院の位をすく、朱雀院の正統に之せらるるに、
よらざるや、その一旦人倫のそんと長く皇胤の位と
まじりぬのゆゑ、くつぬつたふらふか、
と云ふも、
皇胤のゆゑに、
ゆゑに、

披瀝其の物語より、
心づかたまひて、
二条乃后の密通を、
志す源の執心は、
史記に、
ゆゑに、
の

しつゝしつゝ又物法よこらぬ源氏と有るは
密なるといふはきしむべきなり
たつたれら物法をいふはしつゝしつゝ
はみそ部の中の人を物法と云ふはたつたれら
源少納言和泉と諸人の評したる所と云ふは
あきたまつたれらやうにたつたれら
物法をいふはしつゝしつゝはつたれら
はみそ部の中の人を物法と云ふはたつたれら
いふのたつたれらと云ふはしつゝしつゝ
女の筆はしつゝしつゝのたつたれら
わのたつたれらと云ふはしつゝしつゝ
は源少納言和泉と諸人の評したる所と云ふは
あきたまつたれらやうにたつたれら
物法をいふはしつゝしつゝはつたれら
はみそ部の中の人を物法と云ふはたつたれら
いふのたつたれらと云ふはしつゝしつゝ
女の筆はしつゝしつゝのたつたれら

其七 正傳説誤

宇治大納言物法云越前守為時源氏と云ふは
しつゝしつゝのたつたれらと云ふはしつゝしつゝ
あきたまつたれらやうにたつたれら
物法をいふはしつゝしつゝはつたれら
はみそ部の中の人を物法と云ふはたつたれら
いふのたつたれらと云ふはしつゝしつゝ
女の筆はしつゝしつゝのたつたれら

今按は文を傳ゆぬ宣孝卒して或於ゆりぬありて後中宮
へ奉り御しつゝ大のつゝさうりかちゆておゝ奉りそ皇位に
しきりしり浮世のあゝふよ下の述懐うやしきとるや

九月十日 御産當
日の文 には云大御言の君ふらねの君宮の内侍舟の内侍

中務の君大楠の令婦大或於の御りし殿の宣旨よとせしる
人々のつぎうはせしとまはせしるしきとるぬいしとありあふ
あゝとせしるあゝほとるぬとたむひくしきとるぬあゝあ

三

今按しと足あうあゝぬあゝ、或於新奉あゝぬと

十二月廿九日 或於ふりくは二ありて又あり 文云云々すのたかふよそしりて奉りししことひのあゝぬ
そのあゝぬは廿九日

しきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる
しきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる

今按はしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる
たりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる
とるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる
時中宮或於とるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる
よ新奉れ或於はしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる
しきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる
その任よしとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる
あゝぬとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとるしきりしとるあゝぬとる

去後うらうら父君時こはやくもさうう夫直孝も卒し
うら宮仕もせし里中侍りる屋のり後のついでにうらあ
海をうつりおをらるをさうしうらうらうらうらまうら
世系公記といふ名いつきうらうらうら

河海抄云西宮丸大臣安和二年太宰権帥に左遷せられ
まじしうら孫或知とさるくうらうらゆのひるうらうら
大無陵より上東門院へうつりうらうらうらうらうら
うらうらうらうらの物候にうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
にわらうら八月十五夜の日湖あゆうらうら心のすまわうらうらに物

海のり信をうらうらうらうらうらうらうらうらうら
大般若の科紙と奉るまうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おてうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
とまうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

今世に海にもうらうらうらうらうらうらうらうら
あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
たきうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
百よらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

源範政朝臣の提要といふものも西宮殿の九辻の以
成記といふものも一し生れまゝ前のものありとい
つる冷泉院安和二年より寛弘元年迄といふ六年あり
紫日記といふものも安和の以成記をまゝ生れまゝも
襍記といふものも安和の以成記をまゝ生れまゝも
石山系山統のものと称名院内府の八月十五夜石山寺小
ての成記の筆と云ふ一昔のもの成記ありといふもの
たるとまたまゝといふは後にも物語の成記といふもの
ひけるまゝといふは成記といふものも石山寺よりまゝといふもの

とは成記といふものも成記といふものも成記といふものも
楊若せしむるは相壺より成記といふものも成記といふものも
一考章 かつ成記といふものも成記といふものも成記といふものも
船若と成記といふものも成記といふものも成記といふものも
成記といふものも成記といふものも成記といふものも成記といふものも
但源氏の名と名付く成記の画像をまゝといふものも成記といふものも
成記といふものも成記といふものも成記といふものも成記といふものも
又云ふ成記といふものも成記といふものも成記といふものも成記といふものも
成記といふものも成記といふものも成記といふものも成記といふものも
成記といふものも成記といふものも成記といふものも成記といふものも
成記といふものも成記といふものも成記といふものも成記といふものも

老比丘筆をくわくわくわたりて

今按正徹法師のよし授を信しは家或於うその代ふ
として藤氏長者海堂岡自嚴筆をくわくわたりて
とまり細流抄のはけ奥書のもをせりけりけり
しうくしんも自然のもありしとけり
あつに自然のうまもあつ一向は寺傳りし
そねによま教るをんくしんせりけり
のうも又あつしとけり
はらばいまの教りしとけり
老比丘の河うくしん又寛仁二年は道長公轉入道

して法政寺よこしとけり
門院へ或於う先年代りしとけり
入る教りしとけり
戒慢の奥書めきたりしとけり
けあき或於う才をせりしとけり
けりしとけり
らゆ弱るきてたうをせりしとけり

細流抄云凡日本の國史は三代堂録光孝天皇仁和二年八月
のうを記してそねの國史は物傳を記すよ醍醐の帝りて
すは上の日本記よあつしとけり

今按化の母居あり仙居の母あり一なるは化の母は母
花母居るもの評もわけひびくしんしん考用あり

又云化者の年をくるとして紅我孝子の道ありしことつひは中道
に實有て性理を悟らうとて世の世根を改めんと念きなり

今按これな母居るもの一なるは化の母は母
莊子寓言の母居るもの一なるは化の母は母
ついでとてひびく又言家子かひよるに天台の六十卷よりある
らう四諦の法門とありひびくは化の母は母
らうついでとてひびくは化の母は母
らうついでとてひびくは化の母は母
らうついでとてひびくは化の母は母

儒佛のたれとてひびくは化の母は母
きりきりなるもの一なるは化の母は母
ともありし言を化の母は母
て化の母は母

寶の集子古語戒と説くところへは學成於一書言を以て浮氏母居
と化の母居るもの一なるは化の母は母
浮氏母居るもの一なるは化の母は母
と化の母居るもの一なるは化の母は母
と化の母居るもの一なるは化の母は母

今按これいふ言中の言想ありしとて化の母は母

此も新抄撰筆新巻部と云ふは室成部うらみそ
徳経経供養の行りなる所は薬草奇品と送りけり
権大御言定家信の御みりぬやのゆゑにしりま
ぬむまいたのまじりしりまとのや
その一日怪き供養の時勅進のまじりしりま
告白しりまのまじりしりまのまじりしりま
と申すまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
教諭の御言と申すまじりしりまのまじりしりま
御言と申すまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
諸抄よまじりしりまの料言懐鏡みぬもしりまのまじりしりま

りて他を例し作りの言治大御言物語ありやとゆき
物ありしりまのまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
説きまじりしりまのまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
ゆてまじりしりまのまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
作りのまじりしりまのまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
伊豆屋室成部
貞教教王まじりしりまのまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
新巻の講符と申すまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
内百頭貞
為朝臣のまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
中院
通村云の又兼亂法橋鳥丸賢度
卿の子の談儀と申すまじりしりまのまじりしりま
相通茂卿の御説と申すまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま
江あとの諸抄よまじりしりまのまじりしりまのまじりしりまのまじりしりま

は茶の申うぬまけりる茶系ありと年山生を号しりてこれ井のそのりか
海一つ都のうぬまけりる中より新考館もあつてかぬまけり
文うぬまけりるいもとくちりりし七論もあつて禁家の隠徳をり
り―物徳の年ををたらしめりるまけりるのり―千歳のり
うぬまけりる成於とらりるのりかぬのりかぬのりかぬのりかぬ
の揚子もあつてりる―資権もあつてりる同―館もあつてりる物徳
の好物の至極中物言の奥入りりる也是公の岷にもあつてりる
ぬまけりるひろくもあつてりる打一もあつてりるのりかぬのりかぬ
あけりるぬまけりるのりかぬのりかぬのりかぬのりかぬのりかぬ
るし七年のうぬまけりるのりかぬのりかぬのりかぬのりかぬのりかぬ

まゝとらうりやうしきとてうもゆりしつらむまのいしき
ををりしつらむゆまのいしきとてうもゆりしつらむ
あんまの論にかののうもゆりしつらむまのいしき
これの法書の業ををりしつらむのうもゆりしつらむ
大塚のまゆりしつらむまのいしきとてうもゆりしつらむ
まゆりしつらむ

香竹居伴資雄

業とてまゆりしつらむ
まゆりしつらむ

年山先生安房氏ひろく儒佛の書とてうもゆりしつらむ
日記奇書とてうもゆりしつらむ
えりて成終う女徳をりしつらむ
經典と稱せしつらむ
米倉の詩ありしつらむ
りて撃乃くうもゆりしつらむ
講よりりしつらむ
生のうもゆりしつらむ

藤原治之

一とてのゆりしつらむ
ゆりしつらむ

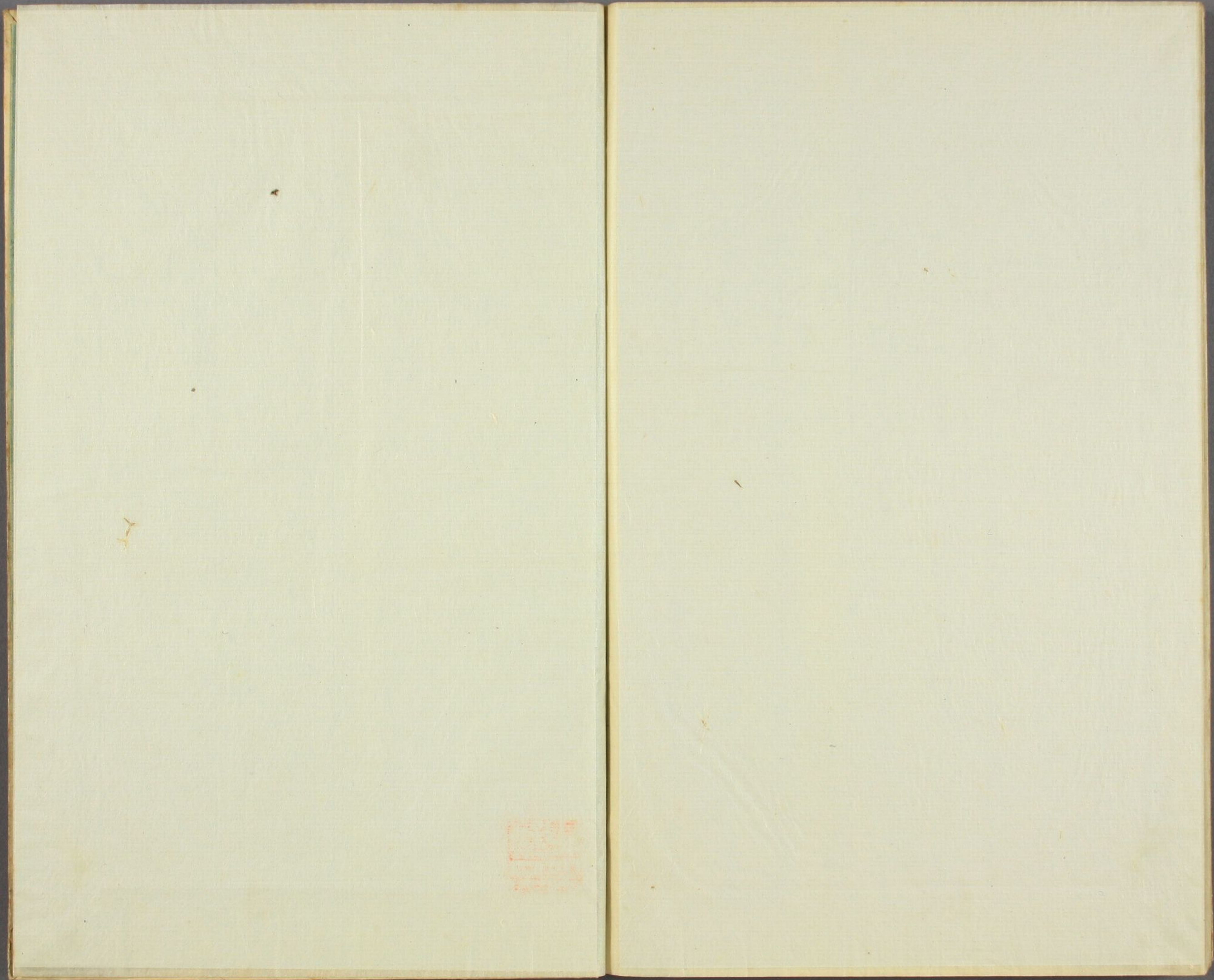
日本紀御房考

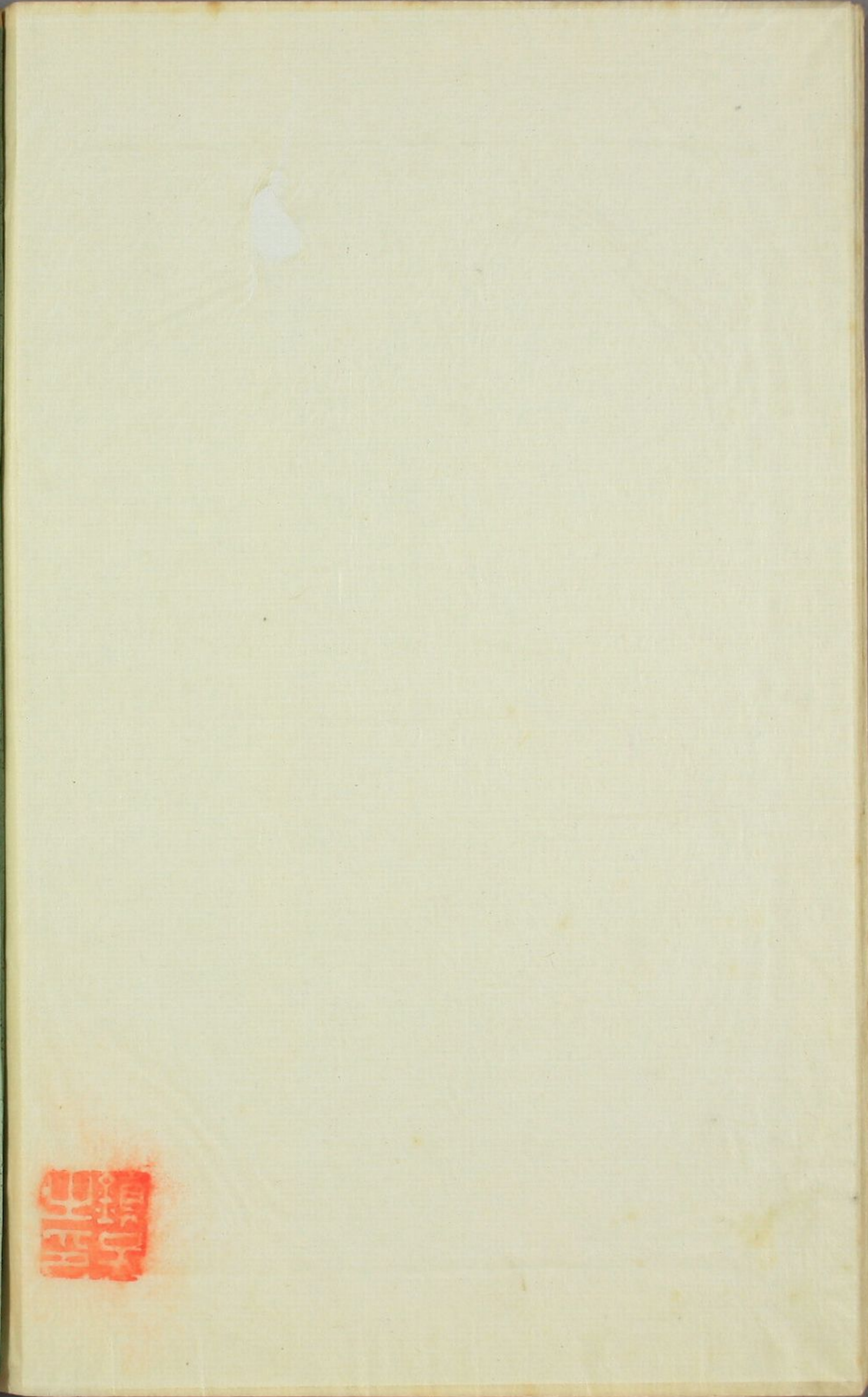
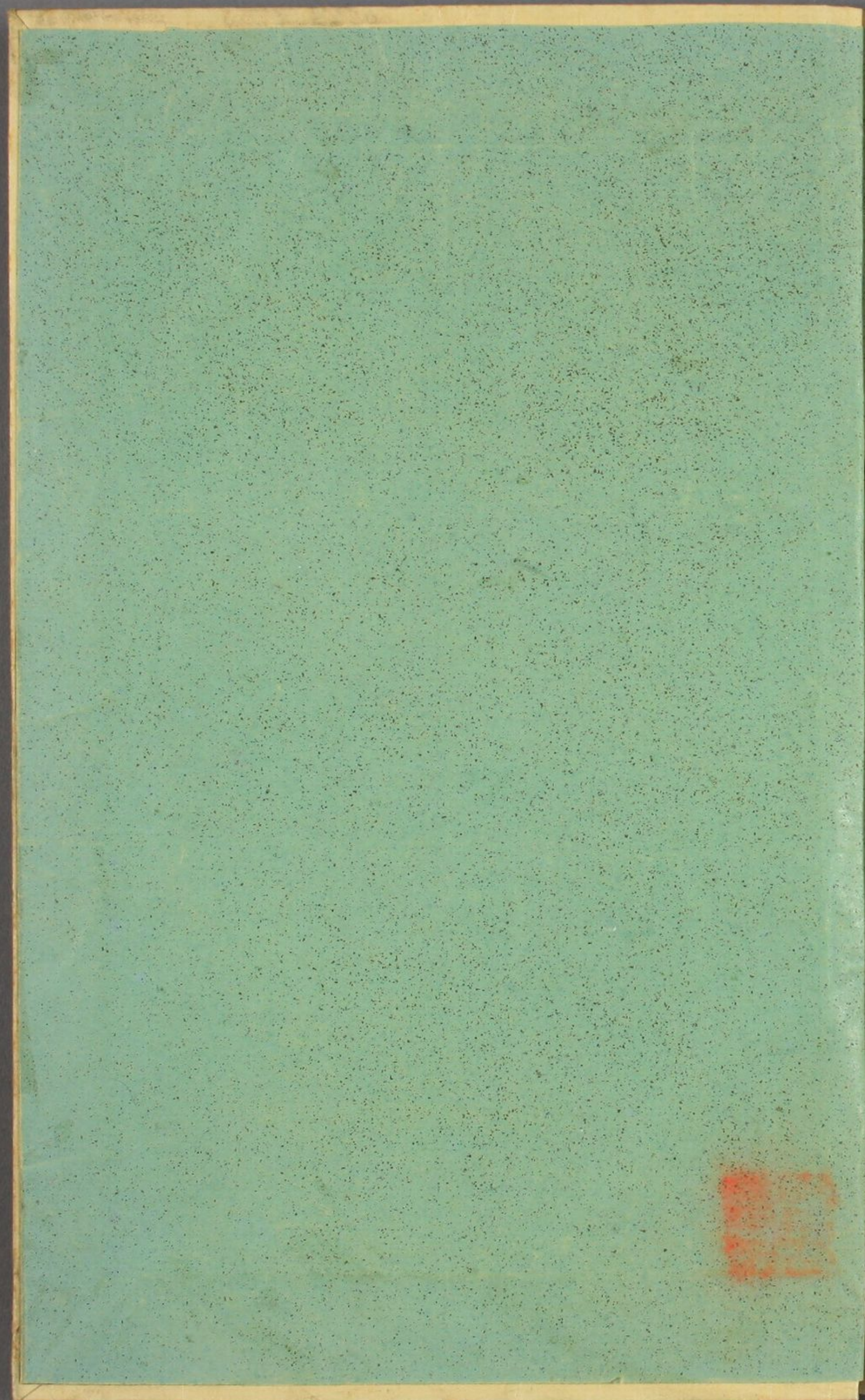
隆天皇登祚弘仁之始拜為夫人云云立為皇后云后自明泡幻萬信
佛理とありて功德の事とせむを記してのらつひに居りしや
と見ゆ又同書に后嘗多造宝幡及繡文袈裟窮盡妙巧左
右不知其意後遣沙門慧萼泛海入唐以繡文袈裟奉施定聖
者とありし書と源氏君の思ふこととていふこととていふこと
巻よばしるの事とていふこととていふこととていふこと
勢多むつといふは存ないあまふまふなりてきざしとていふこと
なりとていふこととていふこととていふこととていふこと
志多むつといふこととていふこととていふこととていふこと
大なるなりとていふこととていふこととていふこととていふこと

きとていふこととていふこととていふこととていふこと
法多むつといふこととていふこととていふこととていふこと
いふこととていふこととていふこととていふこととていふこと
くをををいふこととていふこととていふこととていふこと
君とていふこととていふこととていふこととていふこと
帝とていふこととていふこととていふこととていふこと
いふこととていふこととていふこととていふこととていふこと
おんこととていふこととていふこととていふこととていふこと
の仲成といふこととていふこととていふこととていふこと
とていふこととていふこととていふこととていふこととていふこと

孝養院の帝も源氏君とありし後まことありしは源氏君の
つらひのいふまじきことなれば源氏君とありしは源氏君の
都より入り給ひて帝の御名をいふは源氏君とありしは源氏君の
くわをなせしなりことなれば源氏君とありしは源氏君の
拵とみせしことなれば源氏君とありしは源氏君の
巻よりいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
とらふに相原院へ御使ありしは源氏君とありしは源氏君の
相原の帝は此天皇よりありしは源氏君とありしは源氏君の
年がなやけよものいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
十三日のみありしは源氏君とありしは源氏君の

おまのみをいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
みまをいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
よえをいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
ふやをいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
とらふをいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
あはれをいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
の帝は仁明天皇よりありしは源氏君とありしは源氏君の
位より即をいふことなれば源氏君とありしは源氏君の
冷泉院の帝も下の若菜巻よりありしは源氏君とありしは源氏君の
のみをいふことなれば源氏君とありしは源氏君の







天

